

コメント

コメント1

西城戸：コメントの前に私の方から、お礼とお願いをしたいと思います。私自身も夕張には何度か足を運んでいるのですが、青木先生から過去の貴重な映像資料を観せていただいて、夕張の状況がそれほど変わっていない、ということがリアルに分かりました。社会調査や実証研究をするにあたって、もしくは過去の調査や先行研究を読み込むにあたって、我々は当時の夕張にいたわけではありませんし、直接的な生活経験もないわけです。そのため、データやイメージに偏ってしまう危険性がありますし、文字情報から解釈するには限界もあります。それを超える生活経験・生活資料を、吉岡先生に提示していただいた感じがしています。

昨年秋、青木先生に我々の何人かがお話をうかがう中で、膨大な数のフィルムが残されていることをお聞きしました。吉岡先生のご考案で、お二人で「石炭博物館」の運営を再開されるということですから、あるいは博物館の方で担当されることかもしれません。我々は社会調査データを復元し、「社会調査の博物館」として展示するというプロジェクトを進めておりますので、青木先生がお持ちの映像資料とコラボレーションできるチャンスがあれば、過去の社会調査を再解釈する上でプラスになるのではないかと考えています。その辺りは、あらためてお願いにうかがって一緒にやっていきたいと、個人的には思っています。

総論的に言いますと、私自身としては、吉岡先生のお話を通して、このプロジェクトに対する希望と、一方で絶望ではありませんが、あらためて大きな問題点を指摘された思いが

あります。というのは、我々が作業を進める中で感じていたことを、社会学とは別の観点から、吉岡先生に指摘されたのです。それは何かと言いますと、布施グループの調査データや調査結果を読み返すことに、果たして意味があるのか、ということです。非常に根本的な点を指摘された感じがしています。

というのは、先ほどの吉岡先生のお話は、現在のまちづくりとか市民活動にもあてはまる議論だと思いますが、別の言葉にすれば、「主体形成論」——あるべき目標があって、それに向かって何かをしなければいけない。現段階はここにあって、かくかくの問題がある、というような論法——は、問題点を指摘するだけで、何の解決にもならないわけです。このことは、布施調査への大きな批判であると思います。それではいけない、と。

ご存知のように、布施グループの夕張調査は「主体形成論」的な見方によって、研究が進められています。特定のフィルター（分析枠組み）があまりに強固すぎるので、いくら分析結果をたどって調査票自体の再解釈を試みても、言葉の真の意味での「再解釈」はできないかもしれない、という恐れがあります。しかし、それを強調し過ぎるとプロジェクト自体が崩壊してしまうので、そうした恐れを感じつつも、作業を進めてきた部分があるのですが、その点をご指摘いただいたという気がします。

他方、これは我々が作業を進めてくる中で出てきた知見ですが、調査票の余白部分に、調査者自身が大切だと思った事柄を記したメモがありますが、実はそこにしか、再解釈の可能性がないかもしれない。では、それをどうやって取り上げるのか、コストや労力をど

う考えるのか。また、調査員であった当時の学生や院生の、リサーチ能力やセンスはどうだったのか（これは個人的なことではなく、全般的なことです）。「布施軍団」は短期間で実査をして帰ってくる、という調査スタイルですので、広範囲な部分に網をかけたのは良いけれど、分析枠組みが統一され過ぎていて、多様性、先ほどの吉岡先生の言葉によれば、「違う選択肢」がないのかもしれない、という危機を持ちました。

そこで、提案になりますが、我々が調査票をテキスト化していきますので、青木先生や吉岡先生にデータを眺めていただいて、お二人の感覚から構いませんので、歴史的な部分でこれは違うとか、これはこうだとか、そうしたご指摘をいただくことによって、先ほどの吉岡先生のお話にあった、「現在もしくは未来の視点から過去を見直す」という、このプロジェクトの意義にも合致するような作業ができるのではないかと、というような期待と希望を持った次第です。痛いところを突かれたわけですが、逆に確信というか、「やはりこうなのだ」ということが分かったとの思いもあります。お二人のご講演を通して、このプロジェクトの次の方向性を考えるチャンスを得た感じがしています。

コメント2

齊藤：私自身は、地域社会学を専攻しておりますので、夕張地域の住民生活とかアクティビティという側面から、過去と現在、そしてもう少し先をつなぐような話ができれば、と思います。この『地域産業変動と階級・階層』という本の中で、布施グループが大きな問題関心を持っていたのは、具体的生活という水準でした。そこに立ち返ることが大きなテーマで、〈生活史・誌〉という描き方がなされています。そこには、具体的生活を析出するための「単位」の問題が含まれています。個人なのか地域集団なのか、あるいは自治体や企

業なのか、ということです。

個人と自治体・企業という2つの極については、『地域産業変動と階級・階層』や関連する論文の中で、〈生活の論理〉という視点からテーマ化されています。しかし、個人と地域集団・組織をつないでいく部分は、なかなか見えづらい。そこから、当時の夕張において、どのような地域集団があったのだろうか、という現実レベルの問いが出てきます。これは青木先生のお話や吉岡先生の生活実感——吉岡先生のお話は幌内でしたが——、そこに関連してくる部分です。

自分の話になってしまって恐縮ですが、私は茨城県日立市をフィールドとして、と言っても、企業城下町を直接的なテーマとしているわけではないのですが、地方鉄道の存廃問題に関する調査研究をしています。そこから、日立市のコミュニティ活動についても色々と見えてくるのですが、いわゆる企業城下町のコミュニティ活動と関連づけながら、夕張の地域集団をめぐって、若干の問題提起をしたいと思います。

1960年代まで、日立の労働者の多くは社宅に住んでいて、そうした社宅は、管理職や現場職という職業階層によって分離されていた。先ほどの夕張の映像資料に関連づければ、「何とか台」と名付けられた住宅が、日立の職員住宅にあたると思います。しかし、1960年代中葉に「持ち家政策」へと企業の方針が変わる。すると、一戸建てが主流となって、かつて住居形態によって分かれていた階級・階層が、次第に混在化してくる。これが、日立においてコミュニティが生まれるキッカケとなりました。そして、1974年に開催された茨城国体（国民体育大会）に際して、上からの動員型コミュニティ活動が組織化され、それが市民主導型へと転換していく。そこでは、管理職や現場職といった諸世帯が、いくぶん呉越同舟のかもしれませんが、とにかく関係性を作っていこうとする試みがあったようで

す。

それでは、夕張の場合、何が結節点になるのでしょうか？ 階層別の炭鉱住宅はなかなか厳しい関係性かもしれませんが、他にも色々挙げることができると思います。労組や生協、PTA、町内会といった地域集団。それから、先山・後山などインフォーマルな職域集団。こうした地域集団・職域集団の実態がどうだったのか、それが私自身の問題関心です。これは、先ほど西城戸先生から話のあった、調査票の読み方——調査票をどう再解釈するのか——とも関わってくる問題だと思えます。

そこで核ないし母体となる集団があった場合、コミュニティ活動のテーマは何だろうか？ 私自身、直接的な生活体験がありませんから、多分にイメージ的なものになってしましますが、当時の夕張地域は「社会的共同消費手段」、公共サービスが比較的充実していたように思います。布施グループの調査票からも、電気、水道、石炭などの現物支給あるいは炭鉱病院といった、生活インフラの充実はうかがわれます。そこでは、住民運動のテーマとなりうるような、生活欲求の不充足状態は少なかったのではないかと。これは、1960～70年代の都市（化）とは対照的な事態です。都市社会では、農村部からの人口流入によって、住民生活にかかわるニーズの満たされない状態が続いたことを客観的条件として、「要求型」の住民運動が噴出したわけです。

あるいは、そうした住民運動的なものが生まれにくい土壌があったのかもしれません。これは、吉岡先生のお話にあった「労務管理」の問題系です。自生的に、下から立ち上がってくるアクティビティを封じ込めて、それを、青木先生の映像資料にあったような文化活動・サークル活動に、うまい具合に流し込んでいく素地があったように思います。「連絡員制度」や「監察員制度」という、お互い同士を見張っている厳しい社会関係が、これにあ

たります。

再び、日立の話になってしまって恐縮ですが、例えば、PTAの会議で婦人が発言すると、翌日、その旦那は上司に呼び出され、「君の奥さん、PTAで何か言ったみたいだね」と言われたそうです。連絡員・監察員的な制度が機能しているから、まさに筒抜け状態なんですね。それだけに、企業の全盛期には、その方針に抗する運動の出てくる余地は全くなかったわけです。日立の場合、ローカル線の存続を求める住民運動が、初めての住民運動だった。その運動が、企業の福利厚生と自治体の行財政が厳しくなる中で、福祉をはじめとする公共サービス、そして「公共的なもの」のあり方を問い直すことへとつながっていく。

夕張の場合には、マクロな観点ですが、「スクラップ・アンド・ビルド」という要素が大きかった。やや古めかしい表現ですが、後期資本主義論に「国家独占資本主義」という考え方があります。1970年代、北炭が「夕張新炭鉱」に賭けざるをえなかった背景、そして、1980年代、ガス突出事故以降の「炭鉱から観光へ」という流れ、いずれも内生的なオルタナティブが弱く、（上からの）「国家独占資本主義」的な要素が強かったように思います。少し前のニューヨーク・タイムズの記事では、「財政再建団体」となった夕張市は「新自由主義的な地方分権改革の試金石」と捉えられています。産炭地支援にしてみりゾート開発にしてみても、国レベルの補助金に依存してきた点で、マクロな文脈ではつながっています。

このように考えると、絶望的な気持ちになってしまいますが、もう少し期待を持って良い側面もあると思います。昨今のさまざまな市民活動にみられる「市民的主体性」の現われが、それにあたります。それらは、一点突破的なものではなく、試行錯誤を繰り返しながら、その都度、前に進んでいくようなアクティビティです。例えば、青木先生と吉岡

先生が取り組んでおられる NPO、「炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団」の試み、あるいは年初にマスコミで報道された、自分たちの手で成人式を開こうとする若者たちの取り組み、などです。こうした活動が、何らかのオルタナティブを提示できるのではないのでしょうか？

しかし、ここには問題もあります。そのような多様な人びとの関わりやアクティビティ、組織や活動の「素（もと）」が、夕張から内生的に出てくるのか、それとも外来的なものなのか、という点です。かりに外来的である場合、その外来性を、夕張という地域社会にどのように埋め込み直していくかが、夕張地域のサステナビリティを考えるにあたって、大きな問題になるように思います。また、それは、草の根民主主義とか地域民主主義にとっても、出発点なのか再出発点なのか分かりませんが、そうした「政治の再創造」につながる雰囲気を持ってもいます。

西城戸：ありがとうございました。青木先生、何か補足事項がありましたらお願いします。

青木：先ほど映像をご覧いただきましたが、これまで私は映像資料の活用を続けてきました。まだまだ掘り起こせていない時代もあります。また、8ミリ映像は、家庭の中に眠っているという別の事情があります。それらは、編集されているわけでも、ナレーションやコメントが入っているわけでもなく、いつ撮影されたのか分からない代物が多いのです。そういうものを集めて、ある程度、時代的な情報を盛り込んでいくことができれば、という思いがあります。写真や映像などは、博物館の再開の目途がつけば、公開していくつもりです。

西城戸：それは青木先生が撮られたものですか？

青木：地域の方が、昭和30年代に撮られたものです。当時は8ミリと言いますか、カメラのついたムービーのような映像機が入ってきて、炭鉱労働者の比較的富裕な層は、趣味的に、そうした撮影機を持つ家庭が多かったのです。運動会とか労組の大会といった、その時代の出来事が映し取られています。映画が10～20年に1本だとすれば、8ミリ映像は、その間を埋めていくような存在ですね。ただ、炭鉱社会は人の出入りが多く、フィルムが処分されてしまう傾向もあるので、どの程度出てくるか、というのが問題です。概して言えば、地域の記録映像として、8ミリは比較的有效だという印象を持っています。

先ほど齊藤さんのお話にあった、夕張と日立の比較ですが、企業城下町という骨格を共有していますから、同じような両極端があったと思います。地域の福利厚生は、吉岡さんの言われた労務の側面から、ある程度拡張されていき、これが戦前・戦後には一つの柱、炭鉱社会において不可欠の要素となりました。

それからコミュニティですが、その基盤がどうかたちで炭鉱社会に、例えば夕張炭鉱の中にあったのかと言いますと、その中心は会社のコミュニティで、労働組合も包含されるのではないのでしょうか？そこに、色々な輪が重なっていくことで、コミュニティが作られていく。当時は、地方財政が会社によって代行されていましたから、そういう意味では、地域の主体性が希薄化していたようにも思います。そのことが、地域社会の中で、住民が立ち上がらないことの、大きな背景となっていたのではないのでしょうか？そして、市役所に頼り切ってきたことが、「財政再建団体」という結果につながったのだと思います。

炭鉱社会にはきわめて濃密な人間関係があるとされますが、その要因がどこにあったのか、私自身も十分には掴み切れていません。

ある程度の人の出入りがあって、「閉鎖的な空間の中の開放」というように、色々な条件を満たしていたのが炭鉱社会です。ある程度までは、教育も関係していたと思います。裸での会話は、コミュニケーションをとるための、ベーシックな土壌でした。また、労働者の教育というのは、「主体性はこれこれ」というかたちではなく、ストレートに会話をしなければならぬ環境にあります。それ以外にも、住空間とか職場とか、さまざまな要素がありました。

吉岡：コミュニティをどう定義するかにもよりますが、私は、インフォーマル・コミュニティはけっこう存在していたと思います。それが社会性を発揮できていたのかどうか、一つのリトマス試験紙ですね。

どのようなインフォーマル・コミュニティがあったのか？ 私の父は労務ですから、採用と解雇に直接関わっていました。解雇というのは、たとえそれが本人に問題があったにせよ、人生を大きく変えるものであるから不満が顕在化します。解雇された人が、酔った勢いで自宅まで押しかけて来るということは想定しておかなければいけませんし、それに近いことは実際にありました。何せ父は、夜12時頃でないと帰宅しませんから、万一に備えて我が家の玄関先には木刀が置いてありました。

逆に採用は、インフォーマル・コミュニティがしやすい。例えば、父がリクルートして雄別炭鉱(旧阿寒町, 1970年閉山)から移ってきた鉱員の皆さんは、「雄別会」という組織を作っていました。1983年に父が事務長をしていた炭鉱病院が閉鎖となり、北炭機械へ行くように言われたのを潮に北炭を辞めましたが、引っ越しには「雄別会」の皆さんも大挙して札幌まで手伝いに来てくれました。炭鉱社会では、一度付き合いはじめると長い付き合いになるんですね。

他にも、秋田絡みの付き合いもありました。炭鉱には、鉱山地帯であった秋田県出身者が多いのです。父方の祖母が秋田県出身で、父は秋田県出身ではないけれど樺太から引き上げてから八郎潟の森岳で代用教員をやっていたことがあったので、その縁でつながっていました。その他に、家で飼っていたアイヌ犬(北海道犬)のつながりなど、本当にさまざまなテーマや切り口で、重層的なコミュニティがありました。

その一方で、会社に影響を与えるものは、早いうちに芽を摘まれてしまうということも見られました。私は父の仕事を肯定的に見ながらも、矛盾を感じたことがあります。ある時、歌が好きな母は、小学校教員が指導しているママさんコーラスに入りたいと言いました。私は「体調が良くなるかもしれないから、コーラスに行けば良いのに」と思っていました。父が反対するのです。その教員が、共産党系だからというのが理由です。父の労務としての仕事の一つに、共産党対策というのがありました。教師は、いわば外から来た人で、様々な要因を考慮して行動するのではなく、正義とか公正とか特定の視点にたつて、強い影響力を持って社会的な活動を行います。一方で、それが会社の生産を阻害するのではないかと監視し抑制しようとする会社側の「代理人」である父にとって、自分の妻がそこへ行くのは、北海道弁で言う「いづい」(大きな障害ではないが心持ちは良くない)ということだと思います。子供心に、父の気持ちを分かってはいたものの、「それはそれ、これはこれで良いのでは」と、何か矛盾した、やりきれない気持ちだった記憶があります。少しでも社会性のあることをしようとすると、未然に排除する傾向が強くなり、文化活動やスポーツで発散させるというのが、炭鉱の労務政策の大きな前提としてあったのだと思います。

それでは、どのようなキッカケで、市民型

のコミュニティが作られるようになるのか？夕張では、ついこの間という感じですね。「財政再建団体」になって、霧が晴れたと思ったらい目の前に崖があって、「やるしかない」という体制になって、初めて実現せざるを得なくなりました。

炭鉱がなくなって、市役所が会社に代わる存在となりました。行政が閉山後の炭鉱マンたちをどう見ていたのか、担当者と話してみると良くわかります。会社がなくなると役所に向かって何でも要求してくるから、言うことを聞いてはられない。炭鉱マンは、水道代も電気代もタダだったから、会社がなくなれば、それを全部行政に求めてくる。そんな彼らとまちづくりなどしてはられない——これが行政側の偽らざる認識だったと思います。もちろん炭鉱マンの方にも大きな問題もあります。しかし一方では、行政が炭鉱マンを表面的な接触での理解によって、拒絶してきた部分もあるのではないのでしょうか？

夕張は、会社も行政も当てにできない状態です。市民が互いに対話をして、気づきや相互作用を経て、何とかしていなければなりません。当然、その過程には摩擦や軋轢があって、それを乗り越えて市民運動は出てきますよね。自分だけが正しいわけではなくて、お互いが少しずつ聞く耳を持つところから、芽生えが生まれるのだと思います。だから、私たちはワークショップを開いたり、炭鉱遺産に「場」を作って、第三者としてインタープリテーション(通訳)することによって、色々なかたちでお互いの関係を築こうとするんです。今までは、お互いに門を閉ざしたまま、元炭鉱マンたちは相変わらず放って置かれて、昔の組織、例えば市議会の社会党に頼ってきた。市役所は、そうした組織を相手にせず、残された炭鉱以外の人たちとまちを作っていこうとした。けれども、炭鉱町の半分以上は炭鉱関係者ですから、どう考えたって無理があります。私自身も、夕張市や三笠市に

対して、10~15年前から言い続けていますが、なかなか通じませんね。

夕張の現在の状況は、マラソンをしたことのない人に、いきなり「さあ42km走れ！」と言っているような状況です。だから、足りない部分を埋めたり、励ましたりしていかなければならない。それは、外の力を借りて燃るべきだと思うし、しっかりとサポートするつもりです。ただ、それがずっと「おんぶに抱っこ」になって、構造化されてしまうのは怖いことです。

三笠では、最初ごく少数の人間でやりましたが、今では地元の自立意欲が芽生えてきています。幌内の沢の奥に、大正時代に建てられたレンガ造りの変電所があり、炭鉱遺産を象徴するホールとして使っていたのですが、屋根が落ちてしまってどうしようかという話になりました。北海道新聞から「北のみらい奨励賞」(100万円)をもらったので、このお金で何とかしたい。しかし、屋根を葺き替えるには、500~600万円かかるのです。そこで、地元のメンバーが建設会社に話をつけて、100万円でやってしまった。地元メンバーがみんなで屋根に登って、朽ちた部材を撤去し、専門家でしかできない屋根の板金は業者をお願いしました。活動5年目にして、ようやく自分たちのできる部分は手で解決するという流れになりつつあります。そのキッカケ作りのプロセスについては、一冊の本にまとめましたので、機会があればお読み下さい(吉岡宏高『炭鉱遺産でまちづくり—幌内炭鉱の遺産を主題にした「場」のマネジメント』富士コンテム、2005年)。

どのタイミングで何をやって、どこで手を引くか？幌内の場合には、最初の3年間は外の方が介入したのですが、ある時にパッと手を引きました。そうすると一時的には活動が停滞するけれど、次第に「自分たちでやらなければ」という気持ちになっていく。しかし、あまり手を引き過ぎると、そこで終って

しまうのです。その加減が非常に難しい。そういうことをコーディネートするのは、まさに労務の仕事ですよ。 「大丈夫か」と声をかけたり、「それは駄目だよ」と言ってみたり、「頑張れ」と励ましてみたり、「今は止めた方が良いのでは」とサジェスション（提案）したり。鬼になったり仏になったり、専門家になったり第三者になったり当事者になったり。どういう場面、どういう状態で、どのようにセッティングして、どこまで手をかけるのか。そんなことを職能としてできれば、「内」と「外」という固定的な考え方でいるより、物事は進んでいくと思います。最後まで手をかけると、「内」にいる人があてにしてしまう。

結局、炭鉱から市役所へ、市役所から「外」の人へというように、依存する対象が変わるだけになってしまいます。でも、最初から寒い風を送っては、凍死して終わってしまう。この辺は、実際にやっていて本当に悩ましい部分です。日々悩み、自分は不遜ではないかと思ったり、ある時は自分も役立っていることに喜びを感じたり——自分自身、複雑な気持ちを抱きながら関わっています。一方には現実があり、他方にはやりたいことがある。アクセルを踏まなければならない時も、ブレーキが必要な時もあるのです。そのさじ加減は、やはり父の姿を見て覚えたのかな、という感じがします。